様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２１１４

研究課題名（和文）地域芸術祭による瀬戸内島しょ部の社会構造と「まなざし」の変化

研究課題名（英文）Changes in the social structure and "gaze" of Setouchi islands due to the art festival

研究代表者
原　直行（Hara, Naoyuki）

香川大学・経済学部・教授

研究者番号：４０３０４５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：瀬戸内国際芸術祭（以下、瀬戸芸）開始以来10年間で、訪問客、豊島の住民、移住者の心理的な変化や地域社会への変化を明らかにすべく分析を行った。訪問客の瀬戸芸への評価は高い中で、「食」体験の増加傾向など瀬戸芸の観光としての一般化が進行している。住民も瀬戸芸への評価が高い人が多く、瀬戸芸による変化として移住者の増加、景色の美しさが訪問客に伝わったことの評価が高かった。訪問客による島の魅力の発見により住民も再発見したと考えられる。ただし、医療・福祉など離島での生活条件の改善は課題である。瀬戸芸は訪問客、移住者と店舗を増加させ、地域社会に物理的にも心理的にもポジティブな変化をもたらしたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
瀬戸芸開始以来10年が経過したが、瀬戸芸を訪問客、住民、移住者を中心に包括的・総合的に捉える研究はなかった。本研究はこれまでアートと地域活性化に関する研究を観光学、芸術学、社会学等の分野から行ってきた研究者が、瀬戸芸開催地域の一つ、豊島を対象に訪問客、住民（小中学生を含む）、移住者に対して、アンケート調査やインタビュー調査により研究成果をあげた点で学術的意義が高いといえる。さらに、研究成果をわかりやすく編集した一般向けの報告書を作成し、瀬戸芸の関係者、行政、豊島住民等に配布し、瀬戸芸について客観視できる視座を提供した点で社会的意義もあったといえる。

研究成果の概要（英文）：We carried out analyses to clarify the psychological changes of visitors, residents of Teshima Island and migrants, and changes to the local community in the 10 years since the start of the Setouchi Triennale. While the visitors' evaluation of the Setouchi Triennale is high, the generalization of the Setouchi Triennale as tourism is progressing, such as the increasing tendency of "food" experiences. Many of the residents also highly evaluated it and it was highly evaluated that the number of immigrants increased, and the beauty of the scenery was conveyed to the visitors. It is considered that the residents also rediscovered the charm of the island by the visitors. However, improving living conditions such as medical care and welfare on isolated islands remains a problem to be solved. It can be said that the Setouchi Triennale increased the number of visitors, migrants, and businesses, and brought about positive physical and psychological changes in the local community.

研究分野：観光学

キーワード：地域芸術祭　瀬戸内　島しょ部　まなざし　移住者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、アートによる地域振興や観光まちづくりに注目が集まっている。特に、過疎高齢化の進む地域での現代アートによる活性化の代表的事例として知られているのが、新潟県越後妻有地域で開催されている「大地の芸術祭」である。これに続くものとして瀬戸内海島しょ地域を中心に「瀬戸内国際芸術祭」（以降、瀬戸芸とする）が開催された。2010 年開催時の観客数は予想以上の 94 万人となり、以後アートによる地域活性化が各方面から期待を集めることとなった。

アートによる地域活性化に関する研究が本格的になったのも 2010 年以降である。研究対象としては、地域住民、訪問者、コミュニティ全体等、様々である。また研究領域も公共政策、地域活性、文化政策、都市計画、芸術・アートプロジェクト等に及んでいる。多岐にわたる対象・研究領域において個別事例を中心とした研究が散見されていたが、2014 年に澤村明ほか『アートは地域を変えたか』（慶應義塾大学出版会）、2015 年に吉田隆之『トリエンナーレはなにをめざすのか』（水曜社）、及び 2016 年に藤田直哉ほか『地域アート』（堀之内出版）などが出版され、包括的な研究の試みもスタートした。一方、「瀬戸芸」に関しては、第 4 回（2019 年）で開始からちょうど 10 年となるが、包括的・総合的に捉える研究はなされていないのが現状である。

本研究チームはこれまでアートによる地域活性化の研究を各専門分野（観光学、芸術学、社会学等）から行ってきた。具体的には、2010 年以降、「瀬戸芸」開催地域の一つ、豊島を対象に「瀬戸芸」に対する住民や小中学生を対象とした意識調査、訪問客の満足度調査等である。さらに、2015 年からはアートと地域の 2 つを繋ぐコミュニケーションが地域住民に与える影響をテーマとした共同研究もスタートした。こうして瀬戸芸 10 年目の第 4 回（2019 年）に照準を合わせて、異なる専門を持つ研究者がこれまでの研究成果を深めると同時に、共同研究による新たな視座を含めて、包括的・総合的に捉える研究を行うことになった。

２．研究の目的

瀬戸芸開始後 10 年間の豊島における店舗数の増加の実態を調べ、加えて訪問客、豊島住民や移住者の瀬戸芸やそれによる変化に対する評価や考えを明らかにする。理論仮説として J.アーリ「観光のまなざし」を据え、訪問客、住民、移住者の心理的な変化及び地域やアートへの新たな「まなざし」の獲得を捉え、それが地域社会にもたらす変化を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

豊島の店舗変遷については現地調査、関係者からの聞取り調査、店舗 Web 調査等を行った。豊島住民、移住者、訪問客を対象にした調査では主にアンケート調査やインタビュー調査を行った。また、ACOP についてはアンケート調査やインタビュー調査加えて参与観察調査を実施した。

４．研究成果

（1）豊島の店舗変遷―豊島の店舗変遷からみる瀬戸芸の影響―

瀬戸芸開始後 10 年間における島内の商業店舗の変遷をみるため、現地調査、関係者からの聞取り、店舗 WEB サイト等によって分析を行った。瀬戸芸が始まる 2009 年まで 17 店舗のみであったが、2019 年時点では 60 店舗まで増加した。店舗の変遷・分布を地区別にみると、家浦浜地区が最も増加しており、43 店舗の増加のうち 18 店舗（42%）と集中している。港があって最も観光客が集まり、民家も多い家浦浜地区が選ばれたと考えられる。施設別にみると（表 1 参照）、第 1 回瀬戸芸以後（2010～2012 年）では宿泊施設が 10 店舗と大幅に増加した。瀬戸芸で大勢の観光客が来島したことが原因である。第 2 回以後（2013～2015 年）では、飲食施設が増加した。第 3 回以後（2016～2018 年）と第 4 回時点（2019 年）では、宿泊施設と宿泊飲食施設が大幅に増加した。店舗の増加は移住者の増加と経済波及効果を島にもたらした。一方、住民向けの店舗は依然少なく、大部分は観光客向けである。住民が利用できる店舗の存在が今後は求められる。

表 1　施設別店舗数の推移

	芸術祭以前	第 1 回後	第 2 回後	第 3 回後	第 4 回後
	～2009 年	～2012 年	～2015 年	～2018 年	2019 年
宿泊施設	3	14	16	19	21
飲食施設	2	6	14	20	20
宿泊飲食施設	2	2	2	6	7
商店	10	10	12	12	12
合計	17	32	44	57	60

出所：調査結果を基に作成

（2）訪問客調査

①日本人訪問客の経年的変化

本調査では、瀬戸芸第 1 回（2010 年）、第 2 回（2013 年）、第 4 回（2019 年）の瀬戸芸期間中に豊島を訪れる訪問客を対象としたアンケート調査を実施し、経年的な変化を捉えた。調査項目は訪問経験、滞在日数、訪問目的、訪問＆印象に残っている施設・場所、豊島に関する認知項目、滞在満足度、再訪意向、推奨意向、属性等である。分析結果によると、豊島訪問の目的は、第 1 回から変わらず「アート作品」「芸術祭」が主ではあるが、第 4 回には「食」体験を求める傾向がみられた。他に経年比較による傾向として、再訪者の増加傾向、豊島認知項目の変化等が挙げられる。滞在満足度、再訪意向、推奨意向については、経年的に「とてもそう思う＋まあそう思う」というポジティブな意向が非常に高い傾向にあるが、特に再訪意向については回を経るごとに「ぜひまた来たい」という最も強いポジティブな意向の割合が増加傾向を示している。

②瀬戸芸第 4 回（2019 年）の日本人訪問客の調査

瀬戸芸第 4 回に実施した豊島訪問客（日本人対象）のアンケート調査についての詳細分析結果を報告する。経年調査項目のクロス分析及び第 4 回調査に追加した質問項目による多変量解析を実施した。滞在満足度と属性のクロス分析の結果は満足度に性差はなく、年代別では 50 代よりも 10 代＋20 代グループに満足度が高い傾向がみられた。居住地では香川県＋岡山県のグループよりも、それ以外の県の居住者に満足度が高い傾向がみられた。次に訪問客の滞在満足度、再訪意向、推奨意向に対する影響因子を検討するため、①「自然・食事・移動」に関する気持ち 10 項目、②「訪問後の気持ち」10 項目、③「地域に対する思い」5 項目の追加質問を因子分析した結果、①は「自然」「おもてなし」「移動」の 3 因子、②は「癒し・リフレッシュ」「人との出会い・交流」の 2 因子、③は「地域信頼・愛着」の 1 因子が明らかにされた。これら各因子と属性とのクロス分析の結果には、性別・年齢別にいくつかの特徴的な傾向が見られた。

③瀬戸芸第 4 回（2019 年）の日本人訪問客と外国人訪問客の比較

瀬戸芸は回を重ねるごとに外国人観光客を増やし、瀬戸芸 2019 では訪問客の 24%が外国人であった。豊島を訪問した日本人観光客と外国人観光客について、2019 年 8 月に豊島家浦港でアンケート調査を実施した。回答者数は日本人 394 人、外国人 121 人であった。外国人観光客の日本人観光客との違いは、年齢は 20 代・30 代に集中していること、瀬戸芸と島の自然に加えて、食や買物といった通常の観光的要素も持って訪問していることが挙げられる。また、豊島への信頼感の評価は日本人同様に高いものの、地域愛着を持つまでには至っていない。言葉の壁もあり、島の住民との交流など人・地域とのつながりを見出すまでの深い観光経験はできておらず、それが再来訪意向の相対的低さにつながっていると考えられる。通常の観光地ではない豊島のような地域では、外国人観光客にも通過型の観光ではなく、滞在型で住民との交流など地域とのつながりが感じられる深い観光経験の創出が今後の課題である。

（3）豊島住民調査

①住民による瀬戸内国際芸術祭の評価

豊島の住民を対象に 2020 年 8 月にアンケート調査を行い、154 人から回答があった（回収率 20.0%）。その結果は以下の通りである。瀬戸芸には半分以上（58%）の人がこれまで関わり、瀬戸芸の満足度（5 段階評価で平均 3.25）、継続意向（平均 3.41）とも高い人が多い。一方、評価の低い人の存在も無視できない。瀬戸芸による変化では移住者の増加に対する評価が最も高く、島の知名度、景色の美しさが訪問客に伝わったことの評価が高い。（表 2 参照）また、瀬戸芸との関わりのあった住民はなかった住民に比べて、瀬戸芸の満足度、継続意向の評価が顕著に高く、瀬戸芸がもたらした変化に対する評価も全般的に高い。豊島での生活については、生活満足度（平均 3.56）、居住継続意向（平均 3.87）とも高い。だが、医療・福祉、公共交通については、その重要度を高く評価していながら、満足度は低い。瀬戸芸は継続しながらも、豊島での医療・福祉、公共交通など生活全般に関わる施策の充実も求められる。

表 2　これまでの瀬戸内国際芸術祭が豊島やあなた自身にもたらした変化（5 段階評価）

	平均
島内に若い移住者が増えた	4.06
瀬戸内海と島々の景色の美しさが訪問客に伝わった	3.94
島の知名度が上がった	3.94
島の自然の良さが訪問客に伝わった	3.83
島に活気が出た	3.77
島内に経済効果がもたらされた	3.32
外部から島に人が入ってくることの抵抗感がなくなった	3.31

島内での女性の活躍の機会が増えた	3.18
島での暮らしに誇りが持てるようになった	2.93
島内での高齢者（65 歳以上）の活躍の機会が増えた	2.92
自分の価値観や考え方が変わった	2.75
島外に知人・友人が増えた	2.52

出所：住民対象のアンケート調査（質問項目は評価の高かったものを中心に抜粋）

②小中学生調査

豊島在住の小学 4 年生から中学 3 年生を対象にした調査は、瀬戸芸第 1 回（2010 年）、第 2 回（2013 年）開催時にデプスインタビュー及び学校通しの自記式調査票による悉皆調査を実施し、第 2 回（2013 年）及び 2017 年には比較データとして小豆島在住の小学生にも同様の悉皆調査を実施した。また第 3 回（2016 年）の瀬戸芸に参加したアーティストと豊島中学生が一緒に演劇を作る試みについて、演劇作品を上演した翌年（2017 年）に演劇に参加した中学生を対象としたグループインタビューを実施した。なお、これらの調査に継続して本研究助成により第 4 回（2019 年）開催時に悉皆調査を予定していたが、対象となる小中学生数の減少により未実施となっている。その後、第 1 回開催時点から 10 年以上を経て、大人に成長した当時の小中学生を対象にしたインタビュー調査に切り替えて実施する予定であったが、COVID-19 の影響から離島への訪問が難しく、同様に未実施となっている。

③豊島に移住した若者の就労と移動の意識調査

2019 年と 21 年に豊島で就労する 20 代後半から 30 代前半の若者に「就労」と「今後の移動」に関するインタビュー調査を行った。2019 年には、12 人に「現在の仕事・居住に対する満足感」「今後、他地域に移動する意向があるのか」を調査。全員が仕事・居住に大きな不満はないものの、12 人中 7 人が「移動する/だろう」と回答し、「わからない/迷っている」2 人、「定住する/したい」3 人であった。「移動する」理由には「将来のために我慢するのではなく、今の自分がしたいことをしてあげたい」などの「自分」を中心とした語りが多く見られた。2021 年は前回の対象者のうち 5 人にオンラインでインタビュー調査を行った。うち 3 人が継続して就労しており、2 人が他地域に移動していた。移動の有無に関わらず 5 人の語りは大きく変わり、仕事の責任や地域に根ざすことへの不安を持ちつつ、それらを「引き受けていく」という語りになっていた。若者の定住・定着には好条件の仕事や自己実現の機会だけでは説明できず、リスクを自覚しながらなんとか対応できるだろうとする「自身と社会への信頼」が大きな鍵になると考察した。

（4）ACOP ワークショップ

2016 年度の「アートと地域」の 2 つを繋ぐコミュニケーションが地域住民に与える影響をテーマとした共同研究では、美術教育で用いられる対話型鑑賞の一手法である Art Communication Project（以降、ACOP）を用いた住民と学生メンバーが参加するワークショップを検討・実施した。引き続き 2017 年度以降は、瀬戸芸開催以前からの豊島移住者であり観光ガイドとして豊島で活動する人を中心とした瀬戸芸における対話型鑑賞ツアーの開発を、探索的に検討・設計し実施した。並行して豊島の「アートと地域」をめぐる同ツアーに参加した訪問客がどのようなアート体験・観光体験を得るのか、観光地におけるアートの作用及び訪問客によってまなざされているものは何かを析出することを目的としたツアー参加者へのアンケート調査及びインタビュー調査を実施し、同時に参与観察を行った。

（5）まとめ

瀬戸芸について訪問客、豊島の住民、移住者の心理的な変化及び地域やアートへの新たな「まなざし」の獲得と、それが地域社会にもたらす変化を明らかにすることを目指すものであった。訪問客は経年的に再訪者の増加傾向、「食」体験の増加傾向、豊島認知項目の変化がみられた。また、日本人と外国人訪問客との比較では、外国人はより食や買物など通常の観光的要素が強かった。瀬戸芸の観光としての一般化が進行していると想定される。一方、住民は、瀬戸芸による変化として移住者の増加への評価が最も高く、島の知名度、景色の美しさが訪問客に伝わったことも高かった。また、瀬戸芸との関わりのあった住民はなかった住民に比べて、瀬戸芸による変化に対する評価が全般的に高かった。訪問客による島の魅力の発見により住民も再発見したと考えられる。ただし、瀬戸芸への評価が総じて高いものの、医療・福祉、公共交通などの評価は低く、依然として離島での生活条件の改善は課題である。瀬戸芸の観光化が進む中、生活条件等の課題を残しながらも、瀬戸芸は訪問客、さらには移住者と店舗を増加させ、地域社会に物理的にも心理的にもポジティブな変化をもたらしたといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 原直行	４．巻 93（4）
２．論文標題 住民による瀬戸内国際芸術祭の評価	５．発行年 2021年
３．雑誌名 香川大学経済論叢	６．最初と最後の頁 301-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 原直行	４．巻 第12回
２．論文標題 瀬戸内国際芸術祭におけるインバウンド観光客の実態分析	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域活性学会2020年度研究大会論文集	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本暁美	４．巻 第12回
２．論文標題 瀬戸内国際芸術祭における訪問者の意識動向	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域活性学会2020年度研究大会論文集	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水野佑哉、原　直行	４．巻 232
２．論文標題 豊島の店舗変遷からみる瀬戸内国際芸術祭の影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 香川大学経済学部Working Paper Series	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原　直行、山本暁美	４．巻 94（1）
２．論文標題 瀬戸内国際芸術祭2019における日本人観光客と外国人観光客の意識動向の比較	５．発行年 2021年
３．雑誌名 香川大学経済論叢	６．最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 原直行
２．発表標題 瀬戸内国際芸術祭におけるインバウンド観光客の実態分析
３．学会等名 地域活性学会2020年度研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山本暁美
２．発表標題 瀬戸内国際芸術祭における訪問者の意識動向
３．学会等名 地域活性学会2020年度研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山下里加
２．発表標題 若者世代は「仕事」と「移動」をどう語るのか？
３．学会等名 アートマネジメント学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本暁美、原　直行
２．発表標題 瀬戸内国際芸術祭2019における対話型鑑賞ツアーの試行
３．学会等名 地域活性学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本暁美
２．発表標題 地域広域芸術祭におけるステークホルダーの研究－瀬戸内国際芸術祭を事例として
３．学会等名 社会心理学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本暁美（研究協力者）
２．発表標題 「豊島つなぐプロジェクト」における ACOPワークショップ
３．学会等名 文化経済学会＜日本＞研究大会 2018年度京都大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山本暁美
２．発表標題 地域広域芸術祭における住民小学生への影響 ―「瀬戸内国際芸術祭」を事例として―
３．学会等名 文化経済学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山下　里加 (Yamashita Rika) (00411314)	京都芸術大学・芸術学部・教授 (34319)	
研究分担者	福　のり子 (Fuku Noriko) (10411307)	京都芸術大学・アート・コミュニケーション研究センター・教授 (34319)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関